

シリーズ 「補綴装置および歯の延命のために」 Part 4 歯周組織の炎症

峯 篤史

Diagnosis, treatment and prognosis of apical periodontitis

Atsushi Mine, DDS, PhD

歯周病は成人以降に歯を喪失する主要な原因の一つであり、その治療や予防は口腔機能の維持のための必須条件であることは周知のとおりである。シリーズ「補綴装置および歯の延命のために」のPart 4としてこの歯周病にフォーカスをあてた。また歯周病と同じくブラーク中の口腔細菌が原因となって生じるインプラント周囲炎も、近年増加している歯周組織の炎症性病変として着目した。それぞれ最新の知見が豊富な論文であり、自信を持って皆様にお届けする。

佐々木 猛先生には「歯周補綴治療」をテーマに、骨の形態異常を有する深い歯周ポケットに対する歯周外科処置（組織付着療法、切除療法、再生療法）について、臨床写真と共に解説して頂いた。それぞれの術式は利点のみではなく、欠点も含めてフェアに考察されており、術式選択のポイントについても述べられている。そのポイントにおいて、補綴装置を装着している歯と天然歯とで選択する術式が異なる点が興味深い。そして、二次性咬合性外傷を防ぐための力のコントロールにおいては、支持骨の減少した歯に対する側方力の軽減を図るための考慮点について、具体的に記されている。

古市保志先生には、1965年にヒトにおける実験的歯周炎の報告があつて以来蓄積された歯周病学・歯

周治療学についての科学的データをまとめて頂いた。「歯周治療のエビデンス」では、先に解説のあつた歯周外科処置の有用性についての報告が吟味されている。続いて定期健診（メンテナンス）やSupportive Periodontal Therapy (SPT) の効果、SPT期間中に歯を喪失するリスク、歯周治療の長期的な意義について考慮されている。最終項の「補綴治療と歯周治療」においては、プロビジョナルレストレーションや補綴による連結固定（スプリント）について、ならびに歯周治療後に必要とされる治療期間についての見解が述べられている。

萩原芳幸先生には、インプラント周囲炎の基本知識・病態分類・治療方法・予防方法についての最新情報を執筆して頂いた。インプラント周囲炎の初期病変は見逃されやすく、重篤化するまでの自覚症状も少ない。「インプラント周囲炎の臨床パラメータおよびリスクファクター」や「局所的リスクファクターとそれに対する予防処置」をはじめとした表は、臨床対応や予防処置を理解するうえで非常に有益である。最後の一文「インプラント周囲炎の治療に費やす労力を、その予防に向けることの重要性を改めて強調したい。」から、数多くのインプラント症例を経験されている著者の信念を感じることができる。

題名および執筆者

「補綴装置の長期的安定を目指して 補綴治療にかかれる歯周環境の整備」 医療法人貴和会 佐々木 猛 先生
「歯周治療とEBM」 北海道医療大学歯学部口腔機能修復・再建学系歯周歯内治療学分野 古市保志 先生
「補綴装置・歯の延命のために インプラント周囲炎治療」
日本大学歯学部歯科補綴学第Ⅲ講座 日本大学歯学部特殊診療部歯科インプラント科 萩原芳幸 先生